

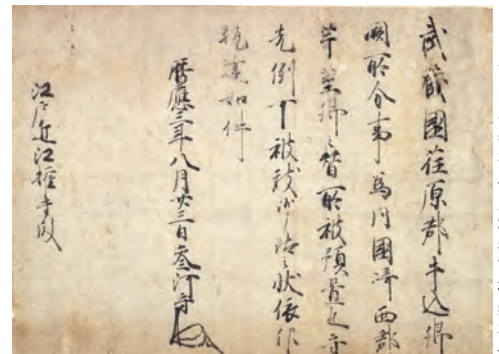
当館の中で中世に触れた展示は、わずか 1 区画。内藤新宿のジオラマに押されて気づかない方も多いと思われます。しかし、区内各地で板碑（供養塔）も散見され、「江戸氏牛込氏文書」とよばれる史料もあります。断片的にはなりますが、たしかに新宿は中世に存在し、人々の暮らした痕跡が残っています。

まず、弘安 6 年（1283）造立の自證院の阿弥陀三尊種子板碑を確認することができます。現存する区内最古の板碑です。この板碑は、緑泥片岩で作られた立派な板碑です。それなりの財の持ち主でなければ作るのは難しいでしょう。時に、鎌倉将軍は維康親王、執権は北条時宗の時代、2 度目の元寇襲来から 2 年後の年号です。この板碑の造立者等はわかりませんが、穏やかならぬ日々の中で、来世への祈り、死者への祈りを込めて供養塔を建てるような人々が当時新宿にいたことを物語っています。



阿弥陀三尊種子板碑 文明18年(1486) 館蔵

続いて、「江戸氏牛込氏文書」の中に「高師冬奉書」（足利義詮御教書）新宿区の地名が初出されます。この「江戸氏牛込氏文書」は、牛込家に相伝した 21 点の書状と 1 点の系図からなる貴重な史料です。高師冬奉書は、江戸近江権守が所有者のいなくなった荏原郡牛込郷の所領を崎西郡芋茎郷（埼玉県加須市）と替えて管理することを足利義詮（鎌倉公方）より仰せつかったことわかる奉書（近侍者が上位者の意を奉じて下達する文書）です。江戸期の荏原郡は、現在の品川区・目黒区や大田区等の区域を指し、牛込は豊嶋郡域に入っていますが、中世の牛込は、荏原郡に組み込まれていたようです。現在の牛込・市谷・戸山一带を含む牛込台地の地を牛込郷とよんでいたようです。



高師冬奉書（足利義詮御教書）

武蔵国荏原郡牛込郷
關所分事、為二同国崎西郡
芋茎郷之替一、所レ被二預置一也、守二
先例二可レ被レ致二沙汰一之状、依レ仰
執達如レ件、
（三四〇）
（高師冬）
暦応三年八月廿三日参河守（花押）

江戸近江権守殿

さて、この宛名の江戸近江権守ですが、比定できる人物はよくわかりません。ただ江戸氏は、桓武平氏の流れを組み、坂東八平氏と呼ばれた在地武士団の秩父氏から分出した一族です。武蔵国江戸郷を領した江戸重継が家祖となります。この文書に出てくる牛込郷を拠点とした江戸氏は、武蔵江戸氏の諸系図に見えない庶流の一つと考えられます。

「江戸氏牛込氏文書」をみていくと、室町時代中頃までに、荏原郡桜田郷（現・千代田区南部）も任され、また、足利持氏（鎌倉公方）と甲斐守護武田信長との合戦の際、武田追討軍の一色持家が江戸憲重の労を報告したことにより、持氏からもっとも神妙であると賞されています。そして、足利政氏（古河公方）へ鯛を送り喜ばれていたり、活躍の様子を見ることができます。しかし、この文書を最後に江戸氏の名は消え、江戸氏牛込氏文書には、代わって牛込氏の名前がみえてきます。

この牛込氏は『寛政重修諸家譜』の牛込氏系図によると、小田原北条氏の招きに応じて大胡重行が大胡（群馬県前橋市）の地を去って牛込に居住したとあり、さらに、次の代の大胡勝行の時、大胡氏から地名の牛込に家名を改めたと書かれています。「江戸氏牛込氏文書」にも天文 24 年

(1555) 北条氏康判物の中で牛込に改めたことを確認できます。ただ、大永6年(1526)の北条家朱印状(写)では、宛名に「牛込助五郎(重行)」とあり、すでに改名判物が出される前から牛込を名乗っています。また、その他の牛込重行宛の2通の書状をみても牛込重行を「大胡重行」と書いたものではありません。大胡を名乗ったのは、大胡平五郎(勝行)であり、書状に「大胡」と明記されているのは、大胡勝行のみです。永正7年(1510)から弘治元年(1555)に検地され、永禄2年(1559)の奥書をもつ『小田原衆所領役帳』には、江戸衆の中に「大胡」として記載されています。この時期の領主は大胡勝行と考えられます。この点から考えると、大胡氏が牛込に居住したのは、勝行の時代からで、勝行が重行の跡を継いで姓を「大胡」から「牛込」に改めた可能性が高いのではと思われます。重行を牛込重行と記したのは「牛込」という地名を指しているからで、本来は大胡を名乗っていたのでは、との指摘もありますが、勝行の時に、大胡氏が牛込氏の遺跡を継いだと考えるのがスムーズかと思います。『寛政重修諸家譜』の成立は、寛政年間(1789~1801)と後世になり編纂されたものなので、時代を遡れば遡るほど、信憑性に欠けていきます。そのため、『寛政重修諸家譜』を疑いの目で見てみました。

「江戸氏牛込氏文書」では、江戸氏から牛込氏、牛込氏の中に大胡氏と続いているようですが、残った史料からでは判断が難しいです。

その後の牛込氏ですが、北条氏に従い北条氏が滅亡したのちには、徳川家康に従い肥前国名護屋及び関ヶ原に参加し、その後徳川忠長に配属され、目付を務めていましたが、寛永10年(1633)の忠長改易により仕官先を失いました。寛永13年(1636)に赦免され小姓番士に列し、500石の禄を与えられています。江戸時代の屋敷は小日向牛天神下(切絵図の「小日向絵図」に「牛込常次郎」と記されています)にありました。

ざっと新宿の中世を見てみました。新宿は近世に入り大名屋敷や宿場等々にぎやかに発展していきますが、中世後期の新宿にはその土台ができつつあったのではないかと思います。

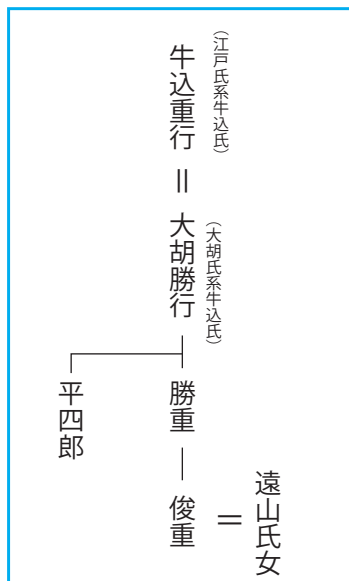
現在でも各所で新資料の発見が相次いでいます。もしかしたら、新宿に関する資料が突如として発見され、新たな中世の新宿が見えてくるかもしれません。その時を楽しみにしていただけたいと思います。



北条氏康判物(写)

可レ被レ号ニ本名牛込ニ之
由、令レ得ニ基意一候、遣レ官之
儀尤候状、如レ件
(一五五五)
天分廿四年
正月六日 氏康(花押)

牛込宮内少輔殿 (勝行)



牛込略系図



宗参寺牛込氏墓

【参考文献】

- 矢島 有希彦 『牛込家文書の再検討』『新宿区立新宿歴史博物館 研究紀要』 第4号 1998年3月
- 矢島 有希彦 『牛込流江戸氏と牛込氏』『史苑』59号 1999年3月
- 今野 慶信 『牛込・神楽坂の中世』『よむみるあるく 東京の歴史 地帯編1千代田区・港区・新宿区・文京区』2018年